

支えることと支えられること

—— 治療者と被治療者 ——

奥 野 政 元

1. 病気・病からの治癒とは何か

2008年6月7日に、活水学院同窓会関西支部総会が、神戸市であり、当時学長を務めていた私も参加させていただいた。その折に、同窓生がその奥さんであったというご縁から、松本浩先生（京都大学医学部名誉教授）が講演をして下さった。大変印象深いお話で、今でも心に残っている。一度聞いただけの私の記憶で振り返るので、あるいは間違いがあるかも知れないが、先生は、まず脳の基本的構造について、

- ① 本能的生物的な働きに関わる層
- ② 哺乳類としての生存競争などに関わる層
- ③ 苦楽・歓喜など人間的な情動思考などの発現する部分が形成される層

と、下から順に3層の構造があると解説され、人間が病気や病に陥り、そこから回復する、あるいは治癒するとは、具体的にはどのような状態になることを指すのか、と問いかけられた。つまり生物的、肉体的レベルでの回復だけでは、真の治療とは言えないのではないかと、言われ、アメリカでの医療現場で、主たる医学的治療の他に、補助治療としての多くの試みがなされている調査などを例にあげながら、脳の全階層に見合う治療や治癒のあり方をめぐって、日本の医療現場のあり方などに係わる話をされた。そのアメリカでの補助治療としての例に、温泉やマッサージやカイロプラクティックなどの多くがあげられていたが、特にその中に「祈り」というのがあって、それが全調査の25パーセント、即ち4人に1人が受け入れているという事実に注目された。これには私も驚くと同時に、改めて病気からの治癒とは何かについて、考えさせられた。

事柄は、病気や病にかかわる現場で、治療あるいは治癒について、治療者と被治療者との人間的な関係にも及ぶ課題でもあるといえよう。そうした現場で、治療者の立場からどのような問題が見渡せるか、一緒に考えてみたいと思う。

2. 治療者と被治療者

医療の現場は、治療する側にいる人と、治療される側にいる人とで成り立っている。この関係は、指導的な世話を施す側と、それを受ける側とで成り立っており、教育現場をはじめとして、多くの社会組織にこの関係が見られる。施す側と受ける側というと、基本的に言って、それは上位にある側と下位にある側との関係でもある。この関係の意味が、特に上位の側に立つ位置にいることに慣れている人、あるいはそのような位置に自らの理想と夢をかけている人には、実はなかなか解りにくいところである。たとえば大学で教職課程をとっている学生が、希望に燃えて教育実習に行き、打ちのめされて返ってくるのがよくある。またボランティア活動などに夢をもって、実際に現場に行き、逆に現場から追い返されて戻ってくるということもある。その時、その現場

から大学に届く声というのは、現場では迷惑であったということが多い。施すという意識、また自分が、幼い、あるいは弱い立場の人に何かできるという、自己幻想的夢そのものが打ち壊されるという意味で、これはこれで重要な出来事でもある。

実は以前、長崎のある大学で、全盲の人から受験したいと申し出があり、大学では教授会で検討して、全学をあげてその学生を受け入れ、支援しようと決議し、学生自治会にも呼びかけて協力を要請した。学生達も喜んで支援を申し出、受け入れるための支援体制まで協議し、設備などにも配慮することを学校も約束した。そうしてその学生は見事合格し、新入生として生活をはじめ、1ヶ月ほどが経過した頃、学生達はその学生が困っていることがないか、また実際に手助けして欲しいことは何かを、今一度本人からお聞きしようと、その学生を呼んで、みんなで話を聞くことにしたそうである。学生達は皆善意にあふれ、何かしてあげたいとの希望にも燃えていたところ、その学生はみんなの前で、静かに語り出した。「私は生まれたときから目が見えませんでしたので、生活については、自分で何もかも出来ますから、今特に皆さんにさせていただくことは、あまりありません。しかし今現在、実は自分ではどうすることも出来なくて、困っていることがあります。皆さん、聞いていただけますか？どうか講義中、教室で私語をしないでほしいのです。目の見えない私は、先生の講義中、全神経を耳に集めて一心に聞いて、点字でノートをとろうとしますが、周囲の皆さんの私語で、聞き取れないことがよくあるのです。どうか私語を止めて下さい。」この言葉に、善意で集まった学生達は、ものも言えなくなって、沈黙してしまったそうである。障害のある人のために、自分がなにか出来るどころではない。むしろ自分達は、障害のある人の障害になっていたということで、そのことに初めて思いついたということである。

苦しんでいる人や、弱い立場にいる人のために、自分でできる何かをしてあげたいと願いそれを実行することは、良いことであり美しいことでもあるが、その意識の根底には、自分が他者に対して何かできるという、いわば上位に立つ無意識の思い上がりが忍び込んでいることもある。自分のいる正常で健全な位置(?)に、対象者を引き上げてあげるとでもいうべき思い上がりが、気付かないうちに行動にも表れることもある。このことは、立場が入れ代わったときに、はじめて本当に気付かれるものであり、それがきっかけで、今度はそのような立場に立つこと自体を、自分に断念してしまうことさえある。私自身、今までそのようにして教職を諦めた学生を何人も見てきたが、そのたびに思わされたのは、それに気付くことの重要性であって、かえってそれに気付くことによって、他者の世話をする側の意味が見えてくるはずだと、何度も学生を励まそうとしてきた。そのようなことから、人が人を世話したり、支えたりすることは一体どのようなことか、そしてそこにはどのような人間としての課題があるのかを考え続けてきた。

また私は、自分の所属するキリスト教の教会で、生まれたときから障害を背負わされた幼児の育児支援と、その両親を支えるケアをする活動にかかわり、毎年夏には、教会と合同でキャンプをして、交わりを続けてきた。その高原のキャンプ場で、ある夕食後の休み時間の時、重い障害を持った一人のお母さんが、我が子を胸に抱き締めながら、「この子は私の宝物です。」と言ったのを聞いた。その表情が、いかにも大切に愛おしいという風で、思わず私も見ほれてしまった。それはそのお母さんの愛情がすべてその子に捧げられ尽くして、お母さんは自分についての

一切の思い違いから、解放されているような光景であった。お母さんの存在のすべてが、その子のために尽くすことで、つまり自分を無にすることで逆に満たされている、そのような光景であった。私は深い感動に打たれたが、そのとき、このお母さんは、この子の世話で毎日苦闘と苦悩の連続であろうが、子どもを支えることによって、実はお母さんの方が支えられているのではないか、支えることは支えられることではないかと思えたのである。同じことは、治療者と被治療者の関係、指導者と指導を受けるものとの関係にも及ぼして考えられる。治療することによって治療される。治癒を支えることによって、支えられ治癒される。そのような関係が、両者の間には見られるのではないか、そしてそれが、本来のあるべき人間の対他者関係ではないかと思われたのである。それらのことを、私の専門領域である、近代日本の文芸作品鑑賞にかかわって眺めてみたい。

3. 山本周五郎「さぶ」について

この作品は、1963年に発表されたが、あらすじは、以下の通りである。

江戸でも有名な表具と経師の店「芳古堂」で、12歳の年から奉公している栄二と「さぶ」は、仲の良い親友である。栄二は父母と火事で死に別れた不幸な運命を負っているが、身体つきにも表情にも賢そうな才覚が表れているし、なによりも気の強い性質を持っている。一方の「さぶ」は貧しい農民の子で、生まれつきのろまで愚図なため、家族からももてあまされ、食い扶持減らしの意味もあって奉公に出された。しかし「さぶ」は何をしても要領が悪く、仕事もよく覚えられないので、店のものからは、叱られ、打たれ、バカにされ、いじめられているばかりである。「さぶ」は何度も奉公先を泣きながら逃げだそうとするが、そのたびに栄二が必死に追いかけて探し出しては、励まし言い聞かせて連れ帰る。実際「さぶ」は実家でも、居場所がないのである。のろまではあっても、どこまでも人の好い「さぶ」は、栄二を頼り切って、心からの信頼を寄せるようになる。

やがて二人は共に二十歳も過ぎ、栄二は持ち前の才覚を活かして、一人前の職人として腕をあげるが、「さぶ」は未だに糊作りの仕事しか与えられない。その頃栄二は、両替商で有名な「綿文」からの依頼で、襖の張り替えの仕事があったのを、「さぶ」と一緒にするよう任される。綿文は芳古堂の得意先で、栄二は以前から何年もここに出向いていたが、そこには二人の娘がいて、二人とも栄二が好きで、いつも彼を取り巻いて放そうとしないため、栄二は行くたびに、仕事から外されて遊び相手にさせられていた。特に妹の「その」は、栄二を独り占めにしようとするほど執着しているが、そこには仲働きの女中「おすえ」という娘もいて、実はおすえも栄二も口には出さなかったが、お互いに引かれあっていた。この時も「その」は栄二にまつわり放そうとしない。その上二人は結婚するという噂も立つ。おすえは思い詰めていく。

ところがしばらくして、突然栄二は親方から、綿文の仕事を別の者に代えたから、行く必要はないと告げられる。しかもその理由は言わない。実は綿文の主人が大切にしている「古代箔白地金欄」の高価な布が無くなっていたのに気付いた主人が、家中探しまわったところ、それが栄二の道具袋から出てきたというのである。そのことを兄弟子から聞かされた栄二は、さらに芳古堂

からも追い出されたことを知る。全く身に覚えのない栄二は、怒りと絶望に打ちのめされ、分別を失ったかのように酒に溺れ、女に溺れるが、一方で執念深く、綿文に出かけて掛け合おうとする。そのたびに冷たく追い返されて、最後に無理やり上がり込もうとすると、町内の頭たちが呼び出され、番小屋に引き立てられた上、半殺しの仕打ちを受ける。やがて与力の青木功之進が来て取り調べをするが、栄二は一切ものを言わなくなる。そのため無宿人が綿文に言いがかりを付けたという罪で、石川島の人足寄場に送られることになる。この人足寄場は、長谷川平蔵の発案になるもので、天災、貧困、あるいは性格などから悪事を働いたり、社会から追いつめられ、落ちこぼれたりして行き場の無くなった人間を集め、手職を与え賃金を蓄えさせて今一度世の中に復歸させる、いわば社会の更生施設のようなところである。

栄二は此処でも初めは反抗の態度を崩さず、一切ものを言わなかったが、次第に社会の底辺に生きる人間の赤裸々な姿を学び知っていく。また持ち前の才覚と気の強さで、寄場の危機を救ったりしながら、無宿人たちにも信頼を得てリーダーのような存在にもなっていく。その間「さぶ」と「おすえ」が、探し求め続けた末に、ようやく栄二の居場所を知って、何度も会いに来るが、栄二は会おうともしない。しかし寄場で起こった様々な事件や、そこに生きる人々の真心などに触れていくに従って、栄二は根底から新しい人間として生まれ変わっていく。その一つの事件が、石川島の護岸修理中に起こった事故であった。

潮が引いている間に、浜に何本もの杭を打ち、石を積み上げて石垣を作る工事であったが、栄二が底の地盤に穴を掘っていたとき、突然石垣が崩れて、彼はその下に押しつぶされ砂の穴に埋まってしまう。周囲にあまり人はなく、応援を呼びに何人か走ったが、そのうち潮が満ち始め、全身が海水に沈み込んで行きそうになる。ようやく人々が駆け寄って、石を除くために丸太をこじ入れようとするが、それが足にはさまり、骨が割れんばかりである。その瞬間、彼は「助けてくれ、さぶ」と我知らず二度も叫んで、失神した。結局助け出されるが、足は完全には回復しないだろうと、医者から言われる。

この事件の経緯に、彼の更生と生まれ変わりの内容が象徴的に表現されている。それまでの彼は、才能も勇気もあり、自分が他に抜きん出た存在であるとの強い自信と自負を持っていた。しかも心優しい思いやりもあって、常にのろまな「さぶ」の面倒を見続けていた。心を込めて「さぶ」の心配もし、世話もしていたのであったが、その根底には、自分が「さぶ」を支え守ってあげなければ、「さぶ」はまともには生きられないだろうという、いわば自己中心的な満足感があったのであろう。これが、自分は優秀で、他の誰にも負けないという自尊心を強めた故に、身に覚えのない罪に定められた憤り、悔しさは、自分をかえって破滅に追い込むほど烈しいものであった。しかし死を前にした絶体絶命の苦境に陥って、彼は思わず「さぶ」に助けを求めた。この出来事が意味するものは、自分が支えているつもりでも、本当はそのことによって支えられていたのは、自分の方であったということ、つまり支えることによって支えられていたということの自覚の発見である。栄二は「さぶ」にとって、大切な、なくてはならぬ人だったというより、関係は逆であって、「さぶ」こそが、栄二にとって大切な、なくてはならぬ人だったのである。

そのことを、作者周五郎は、与平という囚人仲間、仲間といっても栄二とは親子ほども年の違う、

小さな呉服屋の主人だった男で、奉公先の主人に気に入られてその娘と結婚したものの、入り婿としての弱い立場に追いつめられ、ついに耐えかねて、奥さんを殺そうとして未遂に終わった囚人、しかも栄二をわが子以上に世話してくれた男に、次のように言わせることによって示している。

「栄さんはきっと一流の職人になるだろうし、そういう人柄だからね、尤も、栄さんだけじゃない、世の中には生まれつき一流になるような能を備えた者がたくさんいるよ、けれどもねえ、そういう生まれつきの能を持っている人間でも、自分ひとりだけじゃなんにもできやしない、能のある人間が、その能を生かすためには、能のない幾十人という人間が、眼に見えない力をかしているんだよ、ここをよく考えておくれ、栄さん」

そして与平は、くり返し、栄二に「あんたは決して一人ぼっちじゃないよ」と言い続ける。栄二はそれに対して、「さぶ、もういちどおまえに会いたかった。」と心の中で叫ぶ。このあたりから、栄二は変身を遂げていき、濡れ衣を着せられて、あれほど烈しく復讐を誓ったこと自体も、次第に小さな事のように思えてくるようになった。そして、寄場を出て「おすえ」と世帯を持ち、「さぶ」と共同で、新しい店を持つまでに再生復活していくのである。

物語の基本的ストーリーを、以上のように追ってみると、この作品の主人公は栄二で、「さぶ」は脇役なのに、なぜ題名が「さぶ」なのかとの疑問が出てきそうである。事実、作品解釈ではこのことが常に問題となってきた。そして「さぶ」の無償の献身がモチーフだから、主人公は「さぶ」だとか、そうだとするとそれは作品の弱点だとか言われてきた。しかし作者自身は「いや、主人公はあくまでさぶだよ」と言っている。「さぶ」とは英語の sub でもあって、leader に対する下位の、あるいは補助の意味を持つ言葉でもある。おそらく作者は、主人公と脇役、シテとワキの関係を、支えることと支えられることの関係として捉え直し、そこに見られる社会的な人間関係のあり方を、自らの視点で訴えようとしたのであろう。作品を注意深く読んでみれば分かるように、栄二は死を前にした瞬間、「さぶ」に救いを求めて叫んだが、それを作者は次のように表現している。「その叫びは声にはならなかったが、なにも見えない真っ赤な空間に、さぶのおろおろしているような顔が、おぼろげに見えつ消えつした。」実は、栄二が無実の罪に追い込まれ、自己破滅にも至る絶望のどん底に陥ったとき、同じように一度だけ、彼は救いを求めているが、それは彼だけを遺して焼け死んだ母に対してであった。「おっ母さん」「おら苦しくってたまらねえよ、おっ母さん」とすすり泣いている。その彼の腕を、肩にかけて介抱するのが、「さぶ」であった。真っ赤な火事の現場で息子を思いながら死んだ母と、今介抱する「さぶ」と、この場面は、栄二にとって、母と「さぶ」とが二重に重なった存在でもあったことを象徴している。そして無償の献身的な愛を象徴するのに、母親の愛ほどふさわしいものはない。栄二が「さぶ」のそばを離れず、支えるのは、彼がこのような愛によって支えられていたからでもあった。そのことに気付いていくのがこの作品のテーマでもあったといえよう。主人公はやはり、「さぶ」であった。

最後に作者は、濡れ衣の一件についての謎を明かしている。高価な金襴の布を栄二の道具袋に入れたのは、「おすえ」であった。女中の自分が、主人の娘と張り合うことはとてもできない。栄二が主人側にとられてしまうと思い詰めた彼女は、栄二を盗人にするような行動に出たしまっ

たのである。そのために、自分の一生を犠牲にするつもりであった。このことは一生秘密にするつもりであったが、「さぶ」が仕込んだ糊瓶の蓋裏に、「栄ちゃんがあ切のことで島送りになったのは、おらの罪だ、一生かかっても、おらはこの罪のつぐないをしなければならない」と書き付けてあったのを栄二が発見して、一瞬、「さぶ」を疑った彼に、「おすえ」は真っ青になって、本当のことを告白したのであった。

〈追記〉以上の拙稿は、平成22年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」看護系大学から発信するケアリング・アイランド九州沖縄構想「講義相互受講体制小部会」の要請を受けて、2011年7月11日に、活水女子大学看護学部学生を対象に行った講義をまとめたものである。その準備に当たってくださった看護学部の先生方、また当日熱心に聴講してくれた看護学部学生に、改めて感謝を申し上げます。